

◆久松久子 選 ～思ひ出の一句～

「力瘤」

姉が女学校に入った折のことである。姉はその初めての夏休みに、隣村に住む小学校の時の恩師の家へ、一緒に合格した友人四人と自転車でお礼に行くことになった。姉は普段、自転車には滅多に乗ったことがなかったので不安気ではあったが、先生にお会いしたい一心で出かけて行った。

夕方になり、姉の帰りが待ち遠しくて家の前の往来に出てみると、丁度、女学生の一団が見えて来た。ところが、姉はおらず、友達の四人だけが通り過ぎてしまった。「お姉ちゃんは」と聞く暇もなかった。心配になり、その場に立っただけで待っていた。やがて、薄暗くなった道の彼方から、しょんぼりとうつむいた姉が自転車に乗って近付いて来た。覚束ない漕ぎ方で、下を向いたままに停まった。姉を見ると、顔の半面が紫色に腫れ上がり、眼はその奥に押しつぶされ、幽霊映画のお岩様の顔そのものだった。

私は、急いで、姉を殊の外可愛がっていた祖母に「お姉ちゃんが大変だ」と知らせた。すぐに祖母が駆け付け、手拭いで冷やすやら医者に電話をかけるやらの大騒ぎとなった。

理由を尋ねると、帰り道に町外れの工場の工員達が女学生の一団が来たのでからかって、軍用犬のシェパードを放したところ、姉の足元で吠え付いたのだそうである。自転車に不慣れな姉は驚いて転び、顔を打ったのだった。側にいた友達は全速力で逃げたので無事だったとのこと。

その後、工場主が謝りに来られたが、祖母は何とも返事をしなかった。私も子ども乍らに生半可な慰めなど通用しないと悟り、姉に声をかけることができなかったが、以来、姉が行く先々に付いて廻り、側を離れることができなかった。

た。

四人の友達からは、心配も見舞いの言葉もなかった。姉も友人のことは何も言わなかったが、私は悔しくて、こんな人達のような人間にはなるまいと心に誓ったのだった。

姉は、私と違ってとても可愛い顔で、両親の良いところばかりが似ており、私とは正反対だった。学校でも学芸会ではいい役ばかりで、野口雨情の「あの町この町日が暮れる」の歌にあわせて絹の着物を着て踊りを披露した。参観に来ていた祖母の顔は実に満足気だった。その次に出て来た私は、証城寺の狸の役だった。♪しょっしょ証城寺、証城寺の庭は〜♪ と、これまた野口雨情作詞の「証城寺の狸囃子」に合わせて、狸のお面をつけて登場すると、祖母がのけ反って笑っているのが舞台から見えた。家に帰ると、「先生の配役は上手い。さすがだ」と祖母がしきりに感心していた。

姉は、祖母の一番自慢の孫だった。毎年、夏になると、北海道の登別温泉に避暑に行くのだが、祖母が連れて行くのは姉だけだった。私は一度も連れて行ってもらったことがなかった。私は田舎の言葉を使うからというのが理由だった。姉は他人から見ても可愛かったようで、北海道まで二日がかりの道中で、汽車の向かいの席に座った少女雑誌の編集者から、モデルにスカウトされたこともあった程だった。しかし、自転車での怪我の後は、目の下に瘤ができ、笑うとその瘤が盛り上がるようになっていた。

やがて、私も姉と同じ女学校に入り、一緒に汽車通学をするようになった。私は友達に会うと、すぐに友達の中に入って行っただが、姉はいつも一人で本を読んでいた。運動は苦手なはずだが、体育のバスケットボールなどでは率先してボールを取りに走っているのを見かけた。普段は一人で静かにしていたが、

必要な時には、ちゃんと努力をする人だった。

姉が女学校を卒業する時、優等生の名前が順に発表された。三番の成績で、「山中妙子」と姉の名前が呼ばれた時は誇らしかった。私は「頑張ったね。お姉ちゃん」と、力いっぱい拍手を贈った。

後になってみると、あの時の目の下の怪我の瘤が、姉の力瘤になったのかもしれないと思った。

白鷺の孤高となりて佇みぬ

久子

### 「戦後のおしゃれ失敗の巻」

学校も出て、平和な世になると、洋画が次々と入ってきた。そのスタイル、着こなしを真似て日本の女性達も洗練されてきた。私も二十二、三の頃は、ヘップバーンのような短くカットした髪型に、全円のスカートに赤い靴をはき、銀座を闊歩したものだ。ある日、有楽町の駅の構内で友達を見つけて追いついたと思ったとたん、大衆の面前で派手に転び、全円のスカートは見事に広がってしまった。友達に「どうして有楽町に出てきたのよ」と当たってしまった。

モンローのスカート煽(あお)る夏の風

久子